



共済とホモ・サピエンスの心

若杉 敬明

「共済」の心が私たち人類を人間にしてくれた。2012年放送のNHKスペシャル『ヒューマンなぜ人間になれたのか』を見て私は強く感銘を受けた。生物の頂点として、現在、地球に君臨しているのは人類である。数億年間、恐竜が地球上を跋扈していたが、6500万年前、恐竜は突然姿を消した。その後、さまざまな動物が出現し、あるものは進化して生き残り、あるものは子孫を絶やした。現在、地球に君臨しているのはホモ・サピエンスと呼ばれるわれわれ現生人類である。それは、われわれが今あるのは、ホモ・サピエンスは集団を形成し、助け合って生きてきたからであるという。ちなみにホモ・サピエンスとは「賢い人間」という意味である。人類の祖先、人類の歴史についてはさまざまな観点から研究が行われてきたが、学問の進化により近年急速に成果が上がり、多くのことが分かってきた。NHKの番組はそれらを丁寧に取り上げ、その成果を紹介するものであった。

人類とチンパンジーとは、600万年前頃、共通の祖先から分化したといわれる。人類は、その後、猿人、原人、旧人等を経て、新人と呼ばれるホモ・サピエンスに進化してきたが、それは一本道ではなく、数多くの種が誕生しては消えていった。現在、世界には多数の人種・民族がいるが、すべてホモ・サピエンスに属し人類としては同じ種である。かつてはネアンデルタール人などの旧人をホモ・サピエンスとする考え方もあったが、骨格などが大きく違うので、現在ではホモ・サピエンスとは異種とされている。

ホモ・サピエンスが誕生したのは約20万年前

であるといわれる。最近の遺伝子研究からは、現在約70億人いる人類のルーツは、約10万年前にアフリカにいた2,000人ほどの集団の中の「たった一人の女性」にたどり着くことが明らかになっている。逆に言えば、他の1,999人の子孫はどこかで絶え、この女性の子孫が10万年の間に増え続け世界に住み着いているのである。もちろん、ほかにもホモ・サピエンスがいたのであろうが消滅してしまったのである。

7万4千年前頃、スマトラ島のトバ火山が大噴火したため、地球は噴煙に覆われ最終氷期と呼ばれる低温時代に突入した。これが1万2千年前頃まで続いたが、この時代は、繰り返し発生する寒冷と乾燥により、生き物はつねに食糧危機に見舞われていた。なおこの間人類は衣服を纏うようになったと言われる。やがてホモ・サピエンスは厳しい生存環境のアフリカを脱出し、数多の困難を克服しつつアジア、ヨーロッパ、オーストラリアへと世界各地に広まり、現在の繁栄を導いたという。

時代は遡るが、恐竜が跋扈した時代、恐竜から逃れるためにサルは樹上生活を始めた。約6500万年前、隕石衝突による気候変動等にともない恐竜が突如、姿を消した。他方森林が減少したため、長い年月を経て草原で生活するサルが出現し、その中から二足歩行をする人類が誕生した。約35万年前に出現したネアンデルタール人は、体格等はホモ・サピエンスよりはるかに大きく頑丈であったが、2万数千年前に絶えてしまった。遅れて誕生したホモ・サピエンスは、他の人類や動物たちとの間で生存競争を生き抜くには弱い存在であったという。動物

として弱小であるがゆえに集団を作って生活するうちに、貧しい食糧を分かち合ったり、作業を助け合ったりする集団が現れた。その協力関係が集団を維持するための心やコミュニケーションのための言語を芽生えさせ発達させた。厳しい環境変動に晒される度に心を進化させ、相手を思う心から生まれる協力的行動で難局を乗り切ってきたという。人を他の動物と差別化するのは「相手を思いやる心」から生まれる行動ができることである。動物は相手を助けることはするが、それは本能的、一方的で思いやりの心によるものではない。集団生活で生まれた仲間を思う心で人類は現在の繁栄を築き上げてきたのである。

10万年の間、多くのホモ・サピエンスの集団が生まれたであろうが、助け合いの心を形成できなかつた集団は絶えてしまった。10万年前のたった一人の女性の子孫である現生人類だけがそのような心を発達させることができ、今日まで生きながらえ繁栄を謳歌している。現生人類である私たちホモ・サピエンスには助け合い、分かち合いの心がDNAとしてある。この心は決して忘れてはいけない。これがNHKの番組の言わんとするところであると私は受け取った。

その後刊行されたNHKスペシャル取材班著『ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか』（角川文庫）を読むと、この番組が実に広範かつ深い取材に基づいていることが分かり、頭が下がる思いである。なお、本書によると、人間はシンパシーを感じる集団には分かち合い・助け合いの心を持つことができるが、そうでない人間には残酷なまでに敵愾心を持つということである。イスラム教の宗派間あるいは対外抗争を見るとなるほどと思わされる。

現代の社会を見ていると、自分だけ良ければよいという人が多くなっているように思われる。トランプ大統領は、パリ協定離脱やオバマ・ケア廃止などを公約にして大統領の座を勝ち取った。地球温暖化はでっち上げと一笑に付し、アメリカの労働者に職を与えるために石炭や石油の採掘を増やすという。まさにアメリカさえ良ければという、分かち合い・助け合いの心をかなぐり捨てた主張である。医療費が高いアメリカにおいて貧しい人に医療機会を確保しようとするオバマ・ケアは中間所得者層の保険料負担を重くするというのが廃止の理由である。助け合いより「自分のことは自分で」が原則であるというのである。さいわい、オバマ・ケア代替法案は頓挫している。他方、ビル・ゲイツは、「子どもを億万長者にはしない」として自ら多額の寄付を行うと同時に、他の億万長者に寄付を勧め多くの賛同者を得ているという。アメリカが健全なホモ・サピエンスの心を持っていることを示す良い例であろう。

協同組合の共済事業は、現代人の本質であるホモ・サピエンスの心に根ざすものである。多くの人々の生活を支えている事業が健全に発展することを心より願っている。ところで、この巻頭言の執筆のために、いくつかの協同組合のホームページを訪れて見た。しかし、そこでは、組合員のために事業を行うことが強調されているが、その事業が助け合いの精神を前提としているということを明記しているサイトは少なかった。ホモ・サピエンスの心が失われがちな現代、人々にその大事さをぜひ喚起していただければと思う。

（ミシガン大学ミツイライフセンター理事
東京大学名誉教授）